

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：34601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730526

研究課題名(和文)友人からの自己への評価が関係内外へ与える影響

研究課題名(英文)The effects of evaluations from close friends on the quality of relationships with the friends, self-efficacy and mental health

研究代表者

谷口 淳一(TANIGUCHI, Junichi)

帝塚山大学・心理学部・准教授

研究者番号：60388650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、友人から総合的な領域や関係関連領域では自己高揚的な評価を、特定の領域では自己確証的な評価を得ていると認知することで、自律、親交、一貫性という3つの自己関連動機を満たすことができ、そのような友人からの評価が、良好な友人関係の形成、維持に繋がり、さらに、関係外での積極的な活動を促すとの仮説モデルを設定し、検証を行うことを目的としていた。一般的な自己評価を用いた検討では予想された結果が得られなかったものの、友人関係で活性化される関係的自己と友人からの評価とのずれを自己確証的な評価とした検討を行うことで、予測を支持する結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：This study revealed the effects of evaluations from close friends on the quality of relationships with friends, self-efficacy and mental health. In Communion and Agency-Global domains, as people get more self-enhancing appraisals from their friends, they would perceive their relationships with their friends, self-efficacy, and mental health were better. In Agency-Specific domain, as people get more self-verifying appraisals from their friends, they would perceive their relationships with their friends, self-efficacy and mental health were better. Two studies, which examined a self-view in general, didn't support the prediction. However, the result of an additional study, which examined a relational self-view in their relationships with their friends, supported the prediction.

研究分野：社会心理学

キーワード：友人からの評価 友人関係 精神的健康 自己確証動機 自己高揚動機 関係的自己

## 1. 研究開始当初の背景

青年期において良好な友人関係を構築し、維持していくことは個人の well-being の観点からも重要なことでもあり、また困難なことでもある。このような友人関係の維持や良好性を考える場合に、関係を構成する二者それぞれの“自己”の問題は見逃せない。つまり、当該関係の中で、自らをいかに位置づけるかということが、良好な関係の構築と関連し、また、関係の中で自分自身に対する肯定感や受容感に繋がる。さらにそれは、当該関係外での積極的な活動や、精神的適応をもたらす。そして友人関係の中でどのように自己を位置づけることができるかは、その友人が自分に対してどのような評価を与えているかに強く依存していると考えられる。

友人からの適切な評価を考えるにあたって議論となるのが、自己確証動機と自己高揚動機との葛藤の問題である。ポジティブな評価を得ることは、高自己評価者の場合、自己高揚動機と自己確証動機をともに満足させるものとなるが、低自己評価者の場合、自己高揚動機を満たすものの、自己確証動機は充足されないこととなる。恋人関係を対象に行われた研究(谷口・大坊, 2008)では、高低自己評価者ともに恋人からはポジティブな評価を望み、またポジティブな評価を得ていると認知していることが示され、自己高揚動機が優先されることを支持する結果が得られた。さらに、そのような恋人からのポジティブな評価を正確であると認知していることも同時に示されていた。この研究では、良好な親密関係においては自己確証動機と自己高揚動機をともに満たすような評価を相手から得ていることが示唆されているものの、具体的にどのように対立する2つの動機のバランスをとっているのか、つまり、2つの動機はそれぞれどのような“領域”で優勢になるのかについては明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

本研究では、Swann & Bosson(2010)が提唱している、自己確証動機と自己高揚動機に先行する3つの自己関連動機に注目した。それは、自律(agency)、関係関連(communion)、一貫性(coherence)の動機である。これら3つの自己関連動機を満たす評価を友人から得ていることが関係内及び関係外での良好性に繋がると予測した。

本研究では、友人関係の中で3つの自己関連動機をすべて満たすためには、自己の異なる“領域”のそれぞれで自己高揚的か自己確証的な評価を得ることが必要であると考えた。具体的にはKwann & Swann(2010)の議論を参考に、自己の“領域”を自律-関係関連と総合的(global)-個別的(specific)の2軸で分類する。自律と関係関連の領域で友人から自己高揚的な評価を得ることはそれぞれ

の自己関連動機を満たすことになる。逆にこれらの領域で自己確証的な評価を得ることは一貫性の動機を満たす。ここで、知的能力や運動能力、社会的スキルなど個別的な領域では自己確証的な評価を得て、“有能である”や“愛されるべき”であるなど、総合的な領域で自己高揚的な評価を得ることで、自律、関係関連、一貫性の3つの動機をすべて満たすことができると考えられる。

(1) 研究1: 親密な同性友人関係を対象とした横断的調査

研究1では、3つの自己関連動機を満たすような評価を友人から得ることが関係内及び関係外での良好性に繋がるのかについて親密な同性友人関係を対象とした横断的調査を行い、検討した。評価の領域について研究1ではまず、自律に関わる領域と関係に関わる領域に分け、さらに自律の領域を、総合的領域と個別的領域とに分類し、3つの領域で検討を行った。

まずは、関係(内)良好性への影響について検討する。それぞれの領域で自己高揚的(ポジティブ)な評価を得ることは、それぞれの領域に関わる自らの事柄を良好なものにすると予測される。よって、3つの領域のうち、関係関連領域において友人から自己高揚的な評価を受けているほど関係良好性は高いと予測される。また、個別的領域で友人から自己確証的な評価を受けることで、友人から理解されていると感じ、結果として関係が良好になると考えられる。よって、3つの領域のうち、自律 個別領域において友人から自己確証的な評価を受けているほど関係良好性は高いと予想される。

次に関係外の良好性への影響について検討する。友人から自分に対してポジティブな評価を受けることは良好な関係の構築を促すだけでなく、関係内外での自分に対する肯定感や精神的健康を高めることが予想される。Swann & Bosson (2010)の理論に従えば、他者からの評価の対象となる自己の領域のうち、関係良好性など“関係”に関わる事柄には関係関連領域、自己効力感や精神的健康など“自己”に関わる事柄には自律領域がより強い影響を及ぼすと考えられる。また、友人からポジティブな評価を受けることが必ずしも自己に良好な影響を与えるわけではない。それは一貫性の動機に反するからである。研究1では、自律の領域を総合的領域と個別的領域(ここでは芸術領域を用いる)に分け、さらにそれぞれの領域の自己評価の高低群で異なる結果を予想した。総合的領域では自己評価高低群ともに友人からポジティブな評価を受けているほど自己効力感や精神的健康が高まるが、個別的領域では友人から自己確証的な評価を受けている場合に自己効力感や精神的健康が高まると予想した。つまり、友人からポジティブな評価を受けているほど自己効力感や精神的健康は自己評価高群では高くなるが、自己評価低群では逆

に低くなると予想した。

(2) 研究2: 大学新入生の友人関係形成プロセスを明らかにするための縦断的調査

大学新入生の大学適応において友人関係の形成は重要である。同じ大学の友人と満足できる関係を形成し、その関係の中に自分の居場所を見つけることは大学新入生にとっては大きな課題となる。研究2では、友人からの自己への評価に注目し、大学新入生の友人関係の形成過程について検討する。Swann & Bosson (2010)の理論に従い、関係の維持に関わるような関係関連領域については、自己評価に関わらずポジティブな評価を、関係の維持との繋がりは薄いと思われる自律個別領域(研究2では知的領域を取り上げる)については、自己確証的な評価を友人から受けることが友人関係満足度を高めると予測する。また、友人関係における居場所感(石本, 2010)については、本来感については上記の関係満足感についての予測が適用されるものの、有能感については自己確証的な評価の影響は見られないと考えられる。さらに上記の予測は、4月下旬よりも、友人関係が安定してくる7月中旬の方がみられると考えられる。

(3) 研究3: 友人からの評価と関係的自己との差異に注目した検討

研究3では、自己評価の代わりに関係的自己評価を用い、友人からの評価と関係的自己評価との差の小ささを自己確証的評価の指標として研究1の再検討を行う。友人からの評価がその友人との関係に与える影響を検討する上では、一般的な自己評価との乖離よりも、友人関係において活性化される関係的自己との乖離を扱う方が直接的な影響を検討できると考えたからである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究1

研究1では、親密な同性友人関係を取り上げ、友人からの自己に対する評価の認知が関係内外にもたらす影響を検討した。具体的には、回答者に最も親密な同性の友人を1人思い浮かべさせた上で、以下の項目に回答を求めた。調査参加者は423名(男性167名、女性253名、性別不明3名、 $Age=19.78 \pm 1.20$ )の大学生だった。

自己評価: 谷口(2012)やいくつかの尺度を参考にして3領域30項目を作成し、5件法で回答を求めた。30項目の内訳は自律総合領域8項目、関係関連領域10項目(ただし分析の過程で他の項目との関連が弱かった1項目を削除)、自律個別領域12項目(6つの下位領域各2項目: 芸術能力、運動能力、知的能力、精神的強さ、社会的スキル、外見)だった。

友人からの評価の認知: 最も親しい同性の友人を1人思い浮かべ、その人からどのような評価を受けているのかについて30項目に5件法で回答を求めた。

関係満足感: Rusbult et al. (1998)の尺度5項目を用いて、7件法で回答を求めた。

自己効力感: 成田ら(1995)のうち12項目を使用し、5件法で回答を求めた。

精神的健康: 諸井(1996)の尺度のうち「うつ」「孤独感」の各5項目を使用し、4件法で回答を求めた。

#### (2) 研究2

研究2では、大学新入生287名(男性98名、女性188名、性別不明1名、 $Age=19.14 \pm 1.36$ )を対象に4月下旬(第1回)と7月中旬(第2回)の2度の調査に回答を求めた。調査項目は以下のとおりである。

自己評価: 研究1で使用した尺度を用いて5件法で回答を求めた。このうち、関係関連領域5項目(思いやりがあるetc.)、自律-個別領域として知的能力3項目(頭が良いetc.)を分析に用いた。

友人からの評価の認知: 同じ大学に通っている友人たちを思い浮かべ、その友人たちからどのような評価を受けているのかについて30項目に5件法で回答を求めた。

友人関係満足感: Rusbult et al. (1998)の尺度5項目に7件法で回答を求めた。

関係内の居場所感: 石本(2010)の尺度を使用し、「本来感」6項目、「自己有用感」7項目に5件法で回答を求めた。

#### (3) 研究3

研究3では、92名(男性42名、女性50名、 $Age=20.09 \pm .90$ )の大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査項目は以下のとおりである。

自己評価: 研究2で使用された14項目について7件法で回答を求めた。内訳は自律総合領域4項目、関係関連領域4項目、自律個別領域6項目(知的能力、社会的能力、各3項目)だった。

友人からの評価の認知: 同じ大学の最も親しい同性の友人を1人思い浮かべ、その人からどのような評価を受けているのかについて30項目に7件法で回答を求めた。

関係的自己: 友人と一緒にいる時の自分について30項目に7件法で回答を求めた。

友人との親密さ: IOS尺度(Aron et al., 1992)を使用した。1項目7件法で回答を求めた。

### 4. 研究成果

研究1~研究3のそれぞれで以下のことが明らかとなった。

#### (1) 研究1の結果

分析の結果、予測通り、関係関連領域において、関係良好性に対して有意な正の影響過程がみられ、これらの領域で自己高揚的な評価を得ていると認知しているほど、関係満足感が高くなっていった。関係の維持に関わると考えられるこれらの領域において、友人から高い評価を得ていると思えることは関係良好性を高めているといえる。ただし、自律特定領域のいずれの因子においても、自己確

証的な評価を得ているほど、関係良好性が高くなるとの結果は得られなかった。

次に、上記とは分析方法を変えた上で、友人からの評価が自己効力感や精神的健康に与える影響について検討したところ、予想を支持する結果が得られ、総合的領域ではポジティブな評価を得ていることが、個別的領域では自己確証的な評価を得ていることが自己効力感や精神的健康を高めることが示された。

#### (2) 研究2の結果

5月時点で友人からどのような評価を得ているのが、7月時点の関係内居場所感(大学の友人たちと一緒にいる時の自己有用感と本来感)に与える影響について分析したところ、友人からどのような領域においても自己高揚的な評価を得ていると5月に認知していれば、7月時点の友人関係内での自己有用感も本来感も高くなっていった。また、友人から総合的な領域で自己確証的な評価を得ていることはその後の自己有用感、本来感を高めており、5月時点での関係関連領域においての友人からの他者評価が低い場合にのみ、自己確証的な評価を得ていることがその後の本来感を高めていた。特定の領域で自己確証的な評価を得ていることの効果はみられず、総合的な領域や関係関連領域で効果がみられたことについては様々な解釈が考えられるが、関係内での居場所感という指標の特殊性について考慮して解釈する必要がある。

また、5月と7月それぞれにおいて、自己確証的および自己高揚的な友人からの評価と関係指標との関連を検討したところ、全体的に予想をしていた方向の結果が得られ、関係関連領域ではポジティブな評価を得ていることが、知的領域では自己確証的な評価を得ていることが関係満足感や関係内居場所感を高めること、またその効果は友人関係が安定してくる7月にみられることが示された。

#### (3) 研究3の結果

研究3では、同じ大学に通っている最も親しい友人と一緒にいる時の自分について回答を求めることで、そのような関係的自己と友人からの評価の差(の小ささ)を自己確証的な評価の指標とした。大学内に既に安定した友人関係がある大学2年生以上を調査対象とし、自己高揚的な評価の指標としては、これまで通り、友人からの評価を用い、自己評価を分析に加えることでその影響を統制した。分析の結果、総合的な自律的領域および、関係関連領域においては自己高揚的な評価を受けていると認知しているほど、友人関係を親密であると評定していた。特定の自律的領域(知的領域、社会的能力領域)においても同様に自己高揚的な評価の影響が見られたが、自己確証的な評価の影響もみられた。つまり、友人からの評価と関係的自己評価とのずれが小さいほど、友人関係を親密であると評定していた。ただし、この影響は友

人からの評価が関係的自己評価よりも高い場合のみにみられた。以上より、関係的自己の視点を加えることで、仮説を概ね支持する結果が得られた。

#### (4) 全体のまとめ

関係内外の良好性に影響を与える、友人からの適切な評価について検討したが、自律-総合領域や関係関連領域において友人から高い評価(自己高揚の評価)を得ることが関係内外の良好性に影響を与えるという結果は一貫してみられたものの、自律-個別領域において自己確証的な評価を得ることの影響は横断的調査を行った研究1や縦断的調査を行った研究2では明確にみられなかった。ただし、友人からの評価と関係的自己とのずれの小ささを自己確証的な評価とした研究3では予想通りの結果が得られた。友人関係という継続的で親密な関係においては、それ以外の関係での自己とは異なる自己が活性化されており、友人からの評価と自己評価とのバランスを検討する上では、関係的自己を考慮に入れて検討することが必要であることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計6件)

谷口淳一、友人からの評価が親密さの認知に与える影響 - 関係的自己との差異からの検討、日本社会心理学会第57回大会、2016年9月、関西学院大学 (発表予定)

Taniguchi, J., Effects of self-enhancing and self-verifying evaluations from close friends on college adjustments., 31th International Congress of Psychology (ICP2016), 2016年7月25日, Yokohama (Japan). (発表予定)

谷口淳一、友人からの評価が大学新入生の友人関係形成過程に及ぼす影響、日本社会心理学会第56回大会、2015年11月1日、東京女子大学

Taniguchi, J., The effects of evaluations from close friends on the quality of relationships with the friends., The 13th annual meetings of the society for personality and social psychology (SPSP 2015), 2015年2月28日, Long Beach (USA).

谷口淳一、友人からの自己への評価が自己効力感や精神的健康に与える影響、日本社会心理学会第55回大会、2014年7月27日、北海道大学

谷口淳一、友人からの自己への評価が関係良好性に与える影響、日本社会心理学会第54

回大会、2013年11月2日、沖縄国際大学

〔その他〕

2015年3月14日 平成26年度科学研究費助成事業研究成果地域還元報告会（帝塚山大学学園前キャンパス）にて発表（「ありのまま」の自分と「なりたい」自分のはざままで）」

6．研究組織

(1)研究代表者

谷口 淳一（TANIGUCHI, Junichi）

帝塚山大学・心理学部・准教授

研究者番号：60388650